

## 大学生を対象とした親性準備性尺度の作成 — 自尊心, 自己嫌悪感, 本来感との関連 —

清水 寿代<sup>1</sup>・鄭 曉琳<sup>2</sup>・浦上 萌<sup>2</sup>  
清水 健司<sup>3</sup>・杉村伸一郎<sup>1</sup>

### Development of the Pre-Parental Readiness Scale for Undergraduate Students

Hisayo SHIMIZU<sup>1</sup>, Xiaolin ZHENG<sup>2</sup>, Moe URAGAMI<sup>2</sup>  
Kenji SHIMIZU<sup>3</sup>, Shinichiro SUGIMURA<sup>1</sup>

**Abstract:** The purpose of present study was to develop the Scale of pre-parental readiness, and investigate of its validity and reliability. Participants were 103 Japanese undergraduate students, of which 39 were boys and 64 girls. Factor analysis confirmed one factor pattern associated with pre-parental readiness. Pre-parental readiness of girls was positively related to sense of authenticity, self-esteem. Pre-parental readiness of boys was positively related to self-esteem, and negatively related to self-disgust. In addition, the scale showed enough reliability, the stability of the scale was confirmed. Frequency of coming in contact with children was related to pre-parental readiness. These results suggest that intervention or education in consideration of growth of pre-parental readiness may become an effective solution method.

**Key words:** pre-parental readiness, undergraduate students, nurturing

### 目 的

近年, 青年の晩婚化が目立つようになってきたが, 依然として精神的・社会的に未成熟なままで親になってしまうケースへの懸念は強く, 青年に対する「親になるための教育」への要請は高まり続けている。この問題の背景として, 核家族化や地域社会での交流の希薄化, 少子化などにより, 幼い子どもを世話している親を身近で見たり, その手伝いをすることで自然に身につけていた, 「親となるための学習」ができにくい社会環境になっていることがあげられている(川瀬, 2010)。このような社会環境で育つことによって, 十分に親性が育まれないまま出産したり, 子どもと十分に触れ合う機会がないまま親になることで, 子どもへの接し方がわ

からない者, 自信が持てない者も多くいることが指摘されている(岡本・古賀, 2004)。

また, 子どもをめぐる問題のなかでも緊急的な課題となっているのが, 児童虐待の増加である。平成24年度中に全国の児童相談所が対応した児童虐待の相談件数は66,807件であり, 過去最多の件数にのぼっている。この児童虐待が増加している背景として, 子どもと接する機会が少ないまま親になっている状況も決して無関係ではないだろう(瀧川・中見・桂田, 2012)。

このように, 親性を育む環境が失われつつある今日, 親となるための資質を学習・育成する親性準備性が重要視されてきている。親性準備性は, 親になる前段階である中・高校生および大学生を対象として, 子どもに対する親としての役割を遂行するための資質に関する研究のなかで生まれた用語である(小池, 2013)。親性準備性の研究は, その多くが大学生や高校生を対象としており(井森・岩治, 2010a, 2010b, 2011a, 2011b, 瀧川・中見・桂田, 2012), 親

1 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設  
2 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期  
3 信州大学人文学部

性準備性の形成における男女差の検討を行った研究においては、男子よりも女子の方が、親性準備性が高いことが示されている(松岡・和田・花沢, 2000a, 2000b, 松岡・堀内・山中・伊藤, 2000)。また、女子大学生の親性準備性と愛着との関連を検討した小池(2013)の研究では、女子大学生の親性準備性には、年少期の安定した愛着よりも成人期の安定した愛着が影響を及ぼしていることなどが明らかにされている。

さて、これまでの先行研究では、親性準備性を子どもに対する養育役割として捉えているところは一致しているものの、その定義においては実に様々であった。そして、親性準備性を測定する尺度の内容は、子どものイメージや関心といった「子どもに関するもの」、結婚や夫婦の役割を含む育児観や育児に対する意識や態度など「子育てに関するもの」、親志向性、親への親和性、親への同一化など「親となることに関するもの」の3つの要素が中心となっている(久保田・渡辺, 1999), それぞれの研究によって、親性準備性を測定する尺度は異なり、一貫性を欠いてきた。

伊藤(2003)は、これまでの先行研究を概観したうえで、親性準備性を「生涯発達の視点から親になってもならなくても健全な次世代を育てる子育てを支援する社会の一員として備えるべき資質」と定義し、養育役割だけではない親性準備性に焦点を当てた尺度の作成を試みている。中・高校生に対して調査を実施した結果、親性準備性尺度は2下位尺度、全7項目からなっており、第1因子は、「小さな子どもに興味がある」、「子どもを育てるのはやりがいのある仕事だと思う」、「赤ちゃんが好きである」、「小さな子どものめんどろをみたり、遊んだりするのはめんどくさい」の4項目、「子どもへの親和」と命名されている。また第2因子は、「将来、自分が親になることなんて、考えたこともない」、「子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う」、「将来、親となって子どもを育てたい」の3項目からなり、「親になることの受容性」と命名されている。しかし、この尺度においても、厳密には先述の「子どもに関するもの」、「子育てに関するもの」、「親となることに関するもの」の3要素と対応しているとは言い難い(伊藤, 2003)ようである。また、多面的な要素を持つがゆえに、いずれの要素が高い人を親性準備性が高い個人であると判断したらよいか不明であるという問題も残

されている。

このように、親性準備性研究においては、親になることが身近に迫っている青年期後期の親性の未成熟さが問題視されているにもかかわらず、青年期後期の男性・女性が子育てにおける準備性(レディネス)をどのくらい備えているのかについては、一貫した量的指標による評価がなされてこなかった。また、青年期後期の男女に対して、親性準備性を育むための教育がなされるためには、どのような要因が親性準備性を促進させるのか、あるいは抑制されるのかに関する詳細な分析が必要となる。さらに、親性準備性を高めるための教育がなされた場合、その教育効果を安定かつ敏感に反映できる測定指標も必要である。以上のことから、本研究では新たに親性準備性尺度を作成し、大学生がどのくらい親性準備性を備えているのか、親性準備性に影響を及ぼす関連要因にはどのようなものがあるのかを検討する。

これまでの先行研究においては、親性準備性を養育役割として読み替えたものが多く見られている。しかし、子どもを育むためには、養育の前に、大前提として子どもに興味を持って接し、慈しむことができるだろうという一種の自信感覚を備えている必要がある。したがって、本研究では、親性準備性を、“実際に子育てが可能スキルを既に有するか否かに関わらず、その基盤となる意味においての、小さな子どもに対する興味・関心、育児に関する意欲的な態度、育児の難しさにも理解が及んでいる状態”であると定義する。また、本研究における親性準備性は、まだ親として子どもを育てた経験を持たない人々を対象とした。子育てスキルは、実際の経験を経ること、または他者から知識を授けたりするような学習によって補完が可能である。しかし、親性準備性は、誰かから教わって育成されるとの側面よりは、青年自身がそれまでの経験と照らし合わせながら、率直にどう思うのか、つまり各個人におけるスキーマのようなものとして存在しており、スキルの有無というよりは、本人および個々人の態度に大きく左右されるものと考えられる。

また、伊藤(2003)も述べているように、この親性準備性は各質問項目に対して、肯定的な回答をする傾向が強く、評定値の分布が偏りやすいことが示唆されている。これは、社会において子どもを慈しむことが周囲からの評価を得やすい、もしくは子どもに興味を持たないこと

が否定的に見られる懸念を生むような文化的土壌に根差すことを反映している。つまり親性準備性尺度は、社会的望ましさの影響を受けやすいものであることを念頭に置いて作成作業に入る必要がある。また、伊藤（2003）による尺度は、全項目が7項目（3件法）から構成されており、2因子構造をなしている。この伊藤（2003）の尺度は、簡便に使用できるという利点を持っているが、項目数の少なから親性準備性の量的な側面を敏感に測定できているかには疑問が残されている。

本研究では、主体的に子どもを育てていこうとする態度に至る準備状態として親性準備性を捉え、その程度を測定することが可能な尺度の作成を行う。また、その際には伊藤（2003）における尺度との関連を検討することで、基準関連妥当性にも言及する。そして、どのようなパーソナリティ要因と関連するののかについても検討することによって、親性準備性が何によって促進・抑制されるのかの方向性にも言及する。本研究で検討するのは、自尊心、自己嫌悪感、本来感とする。これは、大学生が持っている自己概念を、細かいミクロ的視点というよりも、まずは大きなマクロ的視点から見てみる必要があると思われるためである。このような、自己に対するマクロな意味での肯定的もしくは否定的なイメージを持つことが、果たして親性準備性にどう関連するのか、は重要な視点であると思われる。また、本来感という自分らしくある感覚にも言及することで、人格的成長や積極的な他者関係を有することが親性準備性に影響を及ぼすかどうかについても検討する。

## 方法

### 親性準備性についての項目選定

項目の収集・選定にあたっては、伊藤（2003）、佐々木（2007）を参考にして、親性準備性の定義である“実際に子育てが可能なスキルを既に有するか否かに関わらず、その基盤となる意味においての、小さな子どもに対する興味・関心、育児に関する意欲的な態度、育児の難しさにも理解が及んでいる状態”にしたがって心理学を専門とする研究者2名それぞれが項目の収集（素案の作成）を行い、定義に照らし合わせながら合議によって16項目を選出した。

### 調査時期と調査対象者

調査時期は2013年5月に1回目（Time 1）として、新たに作成した親性準備性尺度（Pre-

parental Readiness Scales; PRS）、基準関連妥当性を検討するための子ども・子育てに関する意識尺度（伊藤，2003）、自己概念のあり方を示すパーソナリティ要因として本来感尺度（伊藤・小玉，2005）、自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）、自己嫌悪感尺度（水間，1996）をセットにした質問紙に回答してもらった。加えて、親性準備性尺度においては2ヶ月後である2013年7月に2回目（Time 2）として再び回答してもらった。

調査対象者はH県内の大学に在籍する学生（全員未婚）であり、Time 1では103名（平均年齢21.1歳、 $SD=1.16$ 歳 男性39名（37.9%）、女性64名（62.1%））で、そのうちの88名（平均年齢21.1歳、 $SD=1.17$ 歳 男性32名（36.4%）、女性56名（63.6%））については、Time 2にも回答してもらった。

### 基本的属性

調査対象者における基本的な属性を確認するため、性別および年齢と、本人が兄弟姉妹のうちの何番目にあたるかについても回答を求めた。また、大学入学後において小さな子どもと触れ合う機会（1.よくある、2.一度ないし数回ある、3.全くない）がどの程度であったのかということ、自分自身における結婚の展望（1.したい、2.したくない）についても回答してもらった。

### 質問紙における測定尺度

1. 親性準備性尺度（PRS） 親性準備性について項目選定を行った全16項目について、5段階（全くあてはまらない（1）～とてもあてはまる（5））で評定してもらった。

2. 子ども・子育てに関する意識尺度 伊藤（2003）によって作成された尺度を使用した。この尺度は全7項目からなり、5段階（全くあてはまらない（1）～とてもあてはまる（5））で評定するものであった。尺度は、「子どもへの親和」4項目、「親になることへの受容」3項目からなっていた。

3. 本来感尺度 本来感とは、個人が自分らしくあると感じている全般的な感覚のことである。本研究では、伊藤・小玉（2005）による本来感尺度を用いた。高い得点を示すほど、本来感を感じていることを表している。全7項目からなり、5段階（全くあてはまらない（1）～とてもあてはまる（5））で評定してもらった。代表的な項目としては、「いつも自分らしくいられる」、「これが自分だ、と言えるものがある」、「人前でもありのままの自分が出せる」などで

ある。

4. Rosenbergの自尊感情 自尊感情とは、自己に対する全体的な好意的評価であり、基本的に自分自身を価値あるものとして捉えている感覚のことを指している。Rosenberg 尺度の日本語版である、山本・松井・山成 (1982) による自尊感情尺度を用いた。高い得点を示すほど、自尊心が高いことを表している。全10項目からなり、5段階（全くあてはまらない (1)～とてもあてはまる (5)）で評定してもらった。

5. 自己嫌悪感尺度 自己嫌悪感とは、客観的事実は無関係に、否定的感情が自分に由来するものだと自分嫌だと感じる傾向のことである。水間 (1996) の自己嫌悪尺度のうち、因子負荷量が高い5項目を選定して5段階（全くあてはまらない (1)～とてもあてはまる (5)）で評定してもらった。代表的な項目としては、「自分が全くダメだと思う事がある」、「自分がいやになる事がある」、「自分を憎らしいと思う事がある」などである。

#### 倫理的配慮

調査の実施前に、口頭で調査趣旨と同意に関する説明を調査対象者に行った。具体的には、本調査への協力は強制ではなく任意であること、収集されたデータについては個人を特定するような処理は行わないこと、個人情報（回答してもらった質問紙、データファイルを含める）の管理については厳格に行うこと、以上のことはフェイスシートにも記載しておくとともに、口頭においても説明を行った。その上での質問紙に対する回答および提出をもって、調査に対する同意が得られたものと判断した。

## 結果

### 親性準備性尺度 (PRS) の因子分析

まず、新たに作成した親性準備性尺度の各16項目に対して、評定値の分布に著しい偏りを持つ項目があるかの確認を行った。その結果、3項目 (ex. 親になるということは、素晴らしいことだと思う) において尖度および歪度がともに1を大きく上回っており、測定尺度には適さないと判断されたため、以後の分析からは除外された。そして、残りの13項目について因子分析（最尤法 -Promax 回転；以後も同様の手続きを採用）を行ったところ、共通性が著しく低い3項目 (ex. 子どもが泣いていると、こちらも何だかつらくなる) が見られたため、この3項目を除外した後の残り10項目について再度因子

分析を行った。その結果、固有値の減衰状況が、4.45, 1.57, 0.87, 0.71…と推移していたところから、1因子構造が最適解であると判断した。Table 1に親性準備性尺度の因子パターンを示した。

また、本来感尺度、自尊心尺度、自己嫌悪感尺度についても因子分析を行い、すべての尺度が1因子構造を持つことを確認した。以後の分析においては、各尺度の項目合計得点を算出したものを用いることとした。

### 親性準備性尺度の信頼性についての検討

親性準備性尺度について、測定尺度としての信頼性を有するのかについての検討を行った。まず、PRSについて $\alpha$ 係数を算出したところ、.85と高い値を示しており、十分な内的一貫性を持つことが確認された。また、10項目それぞれの得点 (Item) と尺度合計得点 (Total) との相関関係を確認する I-T 分析を行った。その結果、全ての項目において尺度合計得点と有意な正の相関を示していた。相関係数においても、.56～.79までとなっており、いずれも中程度以上の強さを示していた。このことから、PRSの各項目が測定している概念は、尺度全体と同じ方向性を持っていることが確認された。

次に、尺度合計得点の平均値によって調査対象者をPRS高群 (Good-group) とPRS低群 (Poor-group) の2群に分割し、PRS高群とPRS低群の2群間において各10項目それぞれの得点に有意な差を示すか否かを $t$ 検定によって確認する G-P 分析を行った。その結果、全ての項目においてPRS高群とPRS低群に有意な差が見られ、全て高群の得点が低群の得点を上回っていた。I-T分析およびG-P分析の結果をTable 2に示した。

このように、 $\alpha$ 係数の高さが示すように各項目は等質性を持っており、I-T分析およびG-P分析の結果が示すように、各項目が十分な弁別性を持つことが示され、測定尺度としては十分な信頼性を持つものであることが確認された。

### 再検査信頼性

Time 1において回答してもらった103名の調査対象者のうち、2ヶ月後においても回答してもらった88名について再検査信頼性の検討を行った。Time 1とTime 2の照合においては、携帯番号の下5ケタを記入してもらうことでマッチングを行った。そして、親性準備性のTime 1とTime 2の相関係数は強い正の相関 ( $r = .89, p < .05$ ) を示した。このことは、十分

な再検査信頼性を有していることを示すとともに、親性準備性は、2ヶ月という短期的スパンでは大きな変動を見せないという、比較的安定した特性であることが示唆された。

#### 親性準備性における基準関連妥当性についての検討

次に、新しく作成した親性準備性尺度の基準関連妥当性について検討する。これまでも親性準備性について検討した報告は散見されているが、本研究では、親性準備性において伊藤(2003)が作成した「子ども・子育てに関する意識」との関連を検討した。男女別に親性準備性尺度と伊藤(2003)の子どもへの親和尺度と親になることの受容尺度の相関係数をTable 3に示した。

男性においては、親性準備性は子どもへの親和と強い正の相関( $r=.78, p<.05$ )を示し、親になることの受容とも強い正の相関( $r=.74, p<.05$ )を示していた。また、女性においては、子どもへの親和と強い正の相関( $r=.71, p<.05$ )を示し、親になることの受容とも強い正の相関( $r=.64, p<.05$ )を示していた。男女とも既存の親性準備性の尺度と高い相関係数を示していることから、従来の親性準備性に関する構成概念とかけ離れたものではないことがうかがえる。

#### 親性準備性とパーソナリティ特性について

親性準備性尺度とパーソナリティ特性との関連を検討した。その結果、男性においては本来感と弱い正の相関( $r=.37, p<.05$ )を示し、自尊心とも弱い正の相関( $r=.44, p<.05$ )を示していた。ただ、自己嫌悪感とは有意な相関係数が示されなかった( $r=-.22, n.s.$ )。次に、女性においては自己嫌悪感と弱い負の相関( $r=-.26, p<.05$ )を示し、自尊心とは弱い正の相関( $r=.32, p<.05$ )を示した。ただし、本来感とは有意な相関係数が示されなかった( $r=.17, n.s.$ )。このように、男女ごとにおいて相関関係に大きな違いは見られず、特徴的であったのは、いずれの相関係数も弱い値であった点である。

#### 基本的属性要因における親性準備性のあり方

まず、結婚の展望については、将来的に結婚を“したい”と回答した男性は、38名で、“したくない”と回答したのは僅か1名であった。また、女性においては将来的に結婚を“したい”と回答したのは60名であり、“したくない”と回答したのは僅かに4名であった。このように、結婚の展望においては、ほとんどの回答者が将来の結婚を考えていることが示された。

次に兄弟姉妹のうちで何番目に生まれたかの項目については、男性(第1子:24名, 第2子:6名, 第3子:8名, 第4子:1名)と、女性(第1子:33名, 第2子:14名, 第3子:14名, 第4子:3名)ともに第1子に生まれた青年が多かった。そこで、出生順(第1子・第2子以降)×性別(男・女)で親性準備性にどのような差が見られるのかを2要因分散分析で検討した。その結果、出生順の主効果( $F(1,99)=.00, n.s. \eta^2_p=.00$ )と出生順×性別の交互作用( $F(1,99)=1.77, n.s. \eta^2_p=.02$ )は有意ではなかったが、性別の主効果が有意であった( $F(1,99)=6.73, p<.05 \eta^2_p=.06$ ; 男性 $M=34.9 SD=6.77$ <女性 $M=38.5 SD=5.78$ )。

次に、大学入学後における小さな子どもとの接触について、接触経験(1.よくある, 2.一度ないし数回ある, 3.全くない)×性別(男・女)で親性準備性にどのような差が見られるのかを2要因分散分析で検討した。その結果、接触経験においては有意な主効果は見られなかったが( $F(2,97)=1.92, n.s. \eta^2_p=.04$ )、性別の主効果は有意傾向であった( $F(1,97)=3.43, p<.10 \eta^2_p=.03$ )。また、接触経験と性別の交互作用が有意であったため( $F(2,97)=3.97, p<.05 \eta^2_p=.08$ )、単純主効果の検定を行った。その結果、女性のうちで接触経験が“よくある”と“一度ないし数回”( $M=43.1 > M=37.6$ )の条件間において有意な差が見られ、“よくある”と“全くない”( $M=43.1 > M=34.6$ )の条件間においても有意な差が見られた(Figure 1)。

## 考察

本研究では、親性準備性尺度を作成し、尺度の信頼性・妥当性を確認した。また、親性準備性と関連するパーソナリティ要因についての検討も行った。その結果、以下のことが明らかにされた。

- ① 親性準備性尺度は、1因子構造を成しており、十分な信頼性をもっていた。また、再検査信頼性の結果より、比較的安定した特性であることが示された。さらに、基準関連妥当性が示されたことから、本研究で作成された親性準備性尺度は、従来から考えられていた構成概念とかけ離れたものではないことが確認された。
- ② 親性準備性尺度は、パーソナリティ特性と弱い相関を持つことが示された。
- ③ 大学生女子において、大学入学後に小さな

Table 1 親性準備性尺度（最尤法-Promax 回転）

No	因子
1 小さな子どもの育児をやってみたい	.83
2 将来、育児をすることが楽しみだ	.78
3 幼児が成長してゆく過程に興味がある	.70
4 小さな子どもについつい目がいつてしまう	.62
5 小さな子どもを育てている親は輝いて見える	.59
6 小さな子どもを見ると愛らしいと感じる	.57
7 幼児を見ると、気持ちが癒される	.54
8 赤ちゃんの泣き声を聞くのは、あまり好きではない	-.51
9 自分は、親になって子どもを育てる自信がない	-.50
10 子育てをしていると自分の好きなことができなくなると思う	-.44
	寄与率 44.5%

Table 2 親性準備性尺度における I-T 分析および G-P 分析の結果

No	I-T分析		G-P分析 N=49		N=54		t
	親性準備性 (Total)		低群 (M)	低群 (SD)	高群 (M)	高群 (SD)	
1 小さな子どもの育児をやってみたい	.79 *		3.18	.91	< 4.54	.54	9.10 *
2 将来、育児をすることが楽しみだ	.75 *		3.29	.91	< 4.67	.48	9.48 *
3 幼児が成長してゆく過程に興味がある	.74 *		3.59	1.08	< 4.56	.54	5.65 *
4 小さな子どもについつい目がいつてしまう	.71 *		3.12	1.20	< 4.30	.82	5.74 *
5 小さな子どもを育てている親は輝いて見える	.63 *		3.53	.82	< 4.41	.69	5.90 *
6 小さな子どもを見ると愛らしいと感じる	.65 *		3.92	.84	< 4.74	.44	6.14 *
7 幼児を見ると、気持ちが癒される	.60 *		3.76	.80	< 4.57	.54	6.02 *
8 赤ちゃんの泣き声を聞くのは、あまり好きではない	.62 *		2.71	.89	< 3.59	.92	4.91 *
9 自分は、親になって子どもを育てる自信がない	.58 *		2.57	1.10	< 3.57	.79	5.27 *
10 子育てをしていると自分の好きなことができなくなると思う	.56 *		2.18	.83	< 3.00	.95	4.61 *

note. 項目 8・9・10については逆転項目であるため、得点を反転させた後の指標を用いた。

\* $p < .05$

Table 3 各測定尺度における男女別の相関係数

	子ども 親和	親 受容	本来感	自己 嫌悪感	自尊心	親性 準備性	$\alpha$ 係数	M (男性)	SD (男性)	M (女性)	SD (女性)
子どもへの親和		.45 *	.23	-.08	.19	.78 *	.80	10.97	2.97	12.42	2.10
親になることの受容性	.38 *		.19	-.13	.46 *	.74 *	.69	16.95	2.34	17.01	2.77
本来感	-.10	.15		-.59 *	.70 *	.37 *	.80	21.74	4.90	22.38	4.19
自己嫌悪感	.01	-.10	-.60 *		-.66 *	-.22	.90	17.05	4.83	16.59	4.98
自尊心	.08	.24	.63 *	-.69 *		.44 *	.90	29.64	6.00	31.27	6.65
親性準備性	.71 *	.64 *	.17	-.26 *	.32 *		.85	34.95	6.77	38.48	5.78

note. 右上段は男性 (N=39) の相関係数、左下段は女性 (N=64) の相関係数を示している。

\* $p < .05$

子どもとの接触経験の多い学生のほうが、少ない学生や全くない学生よりも、親性準備性が高いことが示された。

親性準備性におけるパーソナリティ要因との相関係数は、有意なものが散見されていたものの、総じて弱いものであった。これは、青年における子どもに対する興味・関心は、必ずしも

自己に対する肯定的な自己概念を持っていること、もしくは否定的な自己概念を持っていないことに規定されるとは限らないことに言及するものと思われる。もちろん、自己に対する自信にあふれていれば、子どもに対しても寛容な態度を持つことができるかもしれない。反対に、自己に対する自信に乏しければ、奔放な態度を

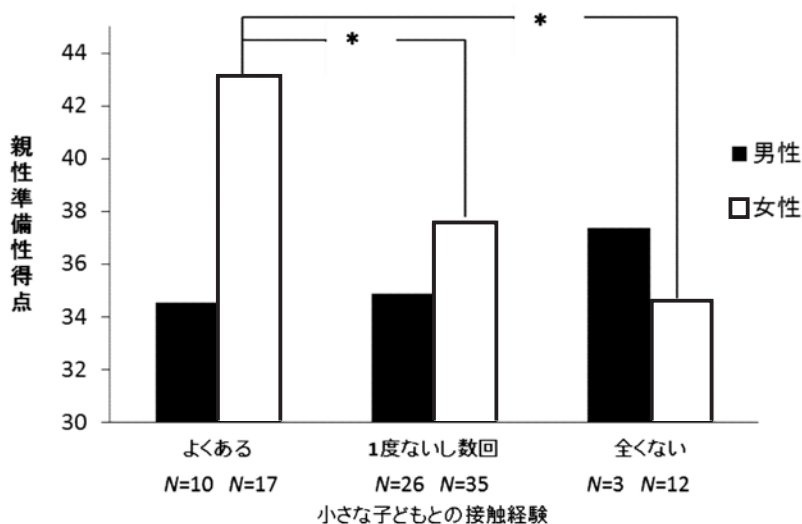


Figure 1 性別と小さな子どもとの接触経験による親性準備性の違い

示す幼児にも腰が引けることも考えられないことではない。しかし、本研究の結果が示すように、子どもに対する興味・関心を持つことは、自己概念の充実が絶対的なものになるとは限らないようである。つまり、自己概念において絶対的な自信を持っていなくとも、親性準備性は育ててゆけることを示唆している。むしろ、このような自己概念以外の要因が強い影響力を持つかもしれない。

また、親性準備性を育成する要因の1つとして考えられるのが、子どもとの接触経験である。本研究では、女子学生において、子どもとの接触経験の頻度で、親性準備性の得点に差がみられ、子どもとの接触経験が多い女子学生のほうが、少ない女子学生よりも親性準備性が高いことが示された。同様の結果が松岡ら(2000)の研究においても認められており、親になる意識に促進的な影響を与えていた要因の1つに、小さな子どもとの接触経験が挙げられていた。このように、先行研究においても子どもとの接触経験は、親性準備性を育成する要因として考えられている。しかしながら、少子化に伴い兄弟数が少ない今日においては、家庭や地域で小さな子どもと接する機会は減少している。このような状況を鑑み、近年、中学校や高校では、家庭科の授業に保育学習を取り入れ、中・高校生の親性準備性を高める取り組みが行われている。

また、滝山(1999)は、保育学習に関する中・高・大学生の意識調査を実施し、家庭科で保育学習を経験していない大学生男子は、保育学習への期待が高く、親子関係や親の役割に関する

学習を希望していることを明らかにしている。そして、大学生男子は、父親になることに漠然とした不安と学習要求を持っていることを示唆し、今後の保育学習のあり方における重要な視点についての指摘を行っている。ただし、本研究の結果を見ると、小さな子どもとの接触経験のある男子学生と、接触経験のない男子学生とでは、親性準備性には明確な差異は見られなかった。これらを総合すると、子どもとの接触経験のない男子学生であっても、子どもに全く興味がないのではなく、まだ表面化していないだけで子どもを育ててゆくことへの責任感のような土台部分については、既に持ち合せている可能性が推測される。

このように本研究の結果は、子どもとの接触経験が親性準備性の発達を促すという、これまでの考え方を一部は支持するものの、親性準備性の促進要因は、子どもとの接触経験だけではなく、その他の要因も考慮する必要があることに言及している。一方、親性準備性の発達を抑制する要因については、先行研究においてもこれまでほとんど検討されてこなかった。したがって、親性準備性の発達を阻害する要因があるのかどうかについても更なる研究が必要である。

そして、親性準備性の促進・抑制要因とともに、今後は、親性準備性を促進させるための介入・教育プログラム(子どものかかわり方など)を検討する必要がある。また、そのプログラムを実施することにより、子どもに対する興味・関心が高められるかといった、効果の評定を行う必要がある。また、親性準備性は、青年

が実際に親になった時に、育児ストレスを緩和する材料になり得るのか、さらに、親性準備性が夫婦間においてどのようなバランスになっているときに、実際の子育ての様子（子育てスキルも含めて）や、夫婦間葛藤にどう影響するののかについても検討する必要があるだろう。いずれにしても、核家族化や地域社会での交流の希薄化、少子化などの時代背景を抱えた若年世代の親性準備性をどう高めてゆけばよいのかは、喫緊の課題である。

最後に、本研究の課題をあげる。本研究では、対象者の属性が一貫していなかったことである。本研究の調査対象者は大学生であったが、学年や所属する学部は異なっており、各属性別の人数となると少数にならざるを得なかった。滝山（1999）は、親性準備性は、中学生よりも高校生の方が、得点が高いが、高校2年生と3年生の間には得点の差がなくなることを示している。一方、井森・岩治の一連の研究（2010a, 2010b, 2011a, 2011b）では、女子大学生は1年生から2年生にかけて親性準備性が高まることを示していることから、年齢や学年の違いによって、親性準備性の発達の仕方は異なるかもしれない。また、将来子どもと関わることを仕事にしたいと考える学生は、そうでない学生よりも親性準備性は高いかもしれない。本研究においては、親性準備性について男女の比較検討を行ったが、今後は性別以外の属性に関する検討も必要であり、更なる研究が望まれる。

## 引用文献

- 井森澄江・岩治まとか（2010a）. 女子大学生における親準備性の発達（1）－入学時のソーシャルスキルについて－ 東京家政大学研究紀要, **50**, 143-149.
- 井森澄江・岩治まとか（2010b）. 女子大学生における親準備性の発達（2）－入学時の養護性について－ 東京家政大学研究紀要, **50**, 151-158.
- 井森澄江・岩治まとか（2011a）. 女子大学生における親準備性の発達（3）－2年進学時のソーシャルスキルについて－ 東京家政大学研究紀要, **51**, 113-120.
- 井森澄江・岩治まとか（2011b）. 女子大学生における親準備性の発達（4）－2年進学時の養護性について－ 東京家政大学研究紀

要, **51**, 121-128.

- 伊藤正哉・小玉正博（2005）. 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, **53**, 74-85.
- 伊藤葉子（2003）. 中・高校生の親性準備性の発達 日本家政学会誌, **54**, 801-812.
- 川瀬隆千（2010）. 大学生の親性準備性に関する研究 宮崎公立大学人文学部紀要, **17**, 29-40.
- 久保田まり・渡辺恵子（1999）. 心理的親準備性から申請への移行に関する発達的研究 昭和大学教養部紀要, **30**, 21-33.
- 小池優美（2013）. 青年期女性の親性準備性と就学前及び成人期の愛着スタイルとの関連 日本女子大学人間社会研究科紀要, **19**, 93-113.
- 松岡知子・堀内寛子・山中亜紀・伊藤倫子（2000）. 男女大学生の親になることに関する意識 母性衛生, **41**, 398-404.
- 松岡治子・和田桂子・花沢成一（2000a）. 青年期男女における親性準備性の性差および母性度・父性度の発達－親性準備性の研究（I）－ 母性衛生, **41**, 492-499.
- 松岡治子・和田桂子・花沢成一（2000b）. 青年期男女における母性度・父性度の発達－親性準備性の研究（II）－ 母性衛生, **41**, 500-505.
- 水間玲子（1996）. 自己嫌悪感尺度の作成 教育心理学研究, **44**, 296-302.
- 岡本祐子・古賀真紀子（2004）. 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関する要因の検討 広島大学心理学研究, **4**, 159-172.
- 佐々木綾子（2007）. 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討 福井大学医学部研究雑誌, **8**, 41-50.
- 瀧川郁美・中見仁美・桂田恵美子（2012）. 大学生の親性準備性と乳児の泣き声に対する反応 臨床教育心理学研究, **38**, 39-44.
- 滝山桂子（1999）. 保育学習に関する中学生・高校生・大学生の意識と課題－生活者の視点を導入して－ 日本家庭科教育学会誌 **42**, 47-54.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.